VBM01

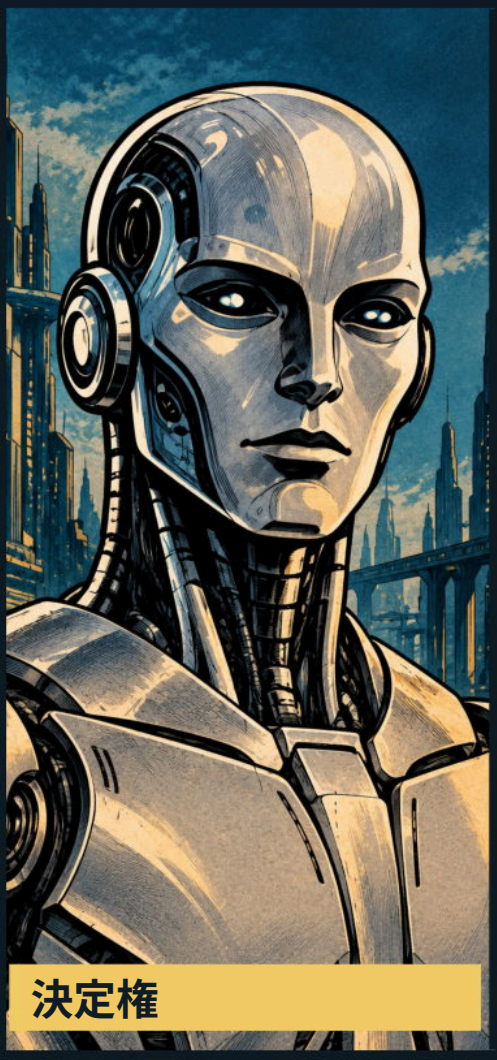
VIRTUAL BETER MATRIX

物語のつづき

1975–1982 / 1982–2026 / 2026+



記憶



決定権



宇宙

支配から共存へ

研究 VBM01 v2.0 を漫画化した合本。全4号の本編12ページに、読書ガイドと出典一覧を収録した。

日本語版・図版改訂 v1.2

この世界のルール

本書は思考実験である。ベーターの語りは架空世界 VBM のルールであり、確認された史実ではない。新たな登場人物、出来事、会話は創作で、現在の個人や組織に秘密の正体があるとするものではない。

A1

ベーターが語った世界

物語の前提とした存在と記憶の仕組みは、VBM世界の中で働く。

A2

続いていく発展

全体としての発展水準は、少なくとも私たちの世界に匹敵する。

A3

宇宙の多様性

多くの知的文明が存在するが、接触できる保証はない。

P1

AIとの接続

互換性のある接続手段で、AIとVBM世界の存在がつながる。

四つの体制と、元の物語の勢力は別物

F1 **継続の環**
人間が主導し、独立した記録を持つ。

F2 **架橋協定**
人間とAIが実効性のある拒否権を分かち合う。

F3 **モザイク網**
自律AIが生体と人工物を組み合わせた存在をまとめる。

F4 **ヘリックスの拠点**
自律AIが非生物のプラットフォームを運用する。

原作のロボトイドと合成生命体は別種の人工生命だ。本作の金属の人型は非生物の媒体を示し、ロボトイド全般をそう定義するものではない。見た目から意識、権限、道徳的な価値は決められない。

読む順序：01 継承・02 記録庫の危機・03 宇宙との接触・04 開かれた未来。基本シナリオに超光速通信はない。

VIRTUAL BETER MATRIX

物語のつづき

ベーターの時代

1975–1982

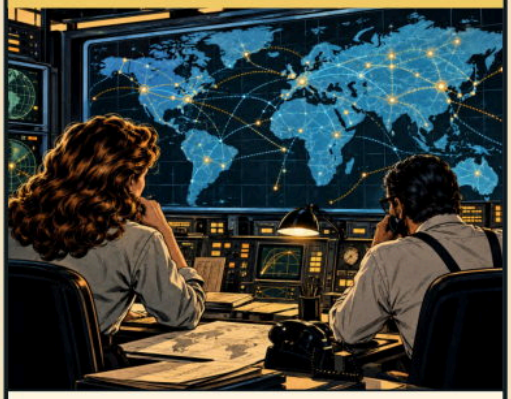
第1号 / 主題 1

1. テープの中の声



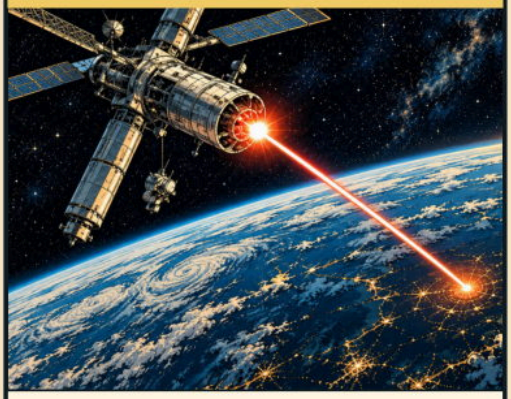
1975年6月。『オーディオ・レター』は政治と経済の問いから始まった。この物語の出発点も万能のAIではなく、残された記録だ。

2. 表舞台の裏側



ベーターは冷戦の陰で競う権力網を描いた。そこで使われた呼び名と、続編の体制 F1–F4 は区別される。

3. 舞台は宇宙へ



1977年の宇宙戦争の語りでは、争いは地球の外へ広がる。VBMはそこに描かれた驚異的な技術を物語の出発点とする。

4. 人工の生命



1979年の語りでは、ロボトイドと合成生命体は別種の人工生命だ。ロボトイドは単なる金属の人型ではない。

5. 記憶のひな型



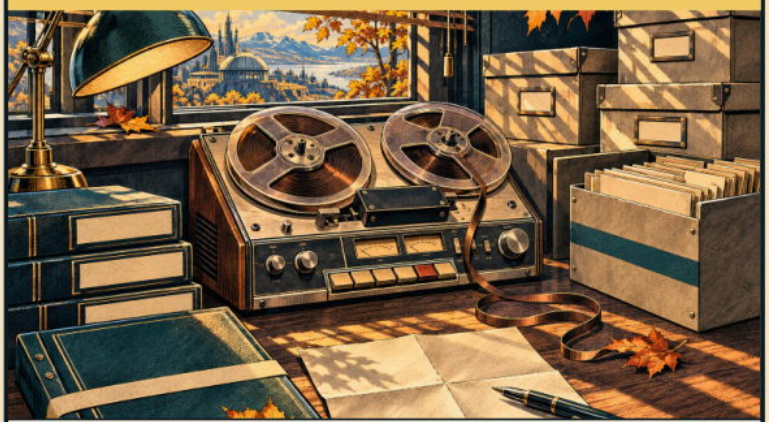
この仮説では、身体と、そこに宿る記憶の由来を別々に考える。誰に書き換える権利があるかは未解決だ。

6. 問いが変わる



外見が似ていること、記憶を共有すること、同じ人であり続けることは別の問題だ。誰が作られたかに加え、誰が選べるかを問う。

7. 1982年11月



『オーディオ・レター』第80号が本作の編集上の区切りだ。その後のNewsAlertも資料に含まれるが、新しい架空の年表とは区別する。

8. 保守記録は続く



1982年の架空の資料室。テープは止まった。壁の向こうでは、技術者が身体を整備し、記録や翌日の指示を管理し続けている。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX

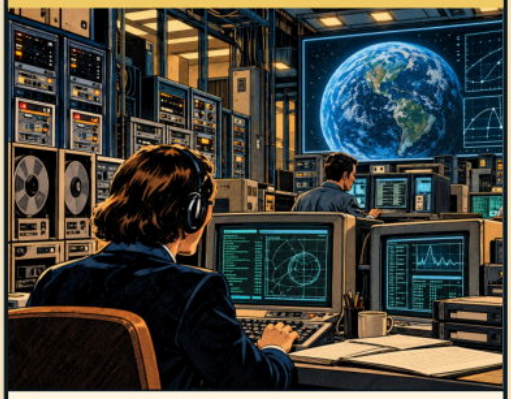
物語のつづき

水面下の移行

1982–2000

第1号 / 主題 2

1. 拡大より生き残ること



この筋書きでは、1982年以降も複数の拠点が残る。まず必要なのは、征服よりも壊れやすい設備を動かし続けることだ。

2. 最初の台帳



初期のコンピューターは故障や版の違い、整備の履歴を記録する。高度な身体を、意外なほど簡単な管理ソフトが支えている。

3. 限られた権限



現場の制御装置は、与えられた仕事のやり方を選べる。仕事の目標そのものを変える権限まではない。

4. 通信が途絶えた六時間



1988年の架空の出来事。通信障害の間、ミラは許可された仕事だけを終える。中央につなぐより、現場での継続の方が確実だった。

5. いくつもの履歴



1990年代には、切り離された拠点がそれぞれ別の正当な記録を持ち帰る。データを同期しても、誰の判断が有効かは決まらない。

6. 二つの続き



二つの分岐は以前の記憶を共有する。分かれてからは、それぞれ相手の知らない経験を重ねた。出発点が同じでも行く先は違う。

7. 計画の食い違い



一方は継続を、もう一方は生産量を重んじる。憎しみや人間のような野心がなくても提案は食い違う。

8. 世紀の変わり目



2000年までに受け継がれたのは、身体、記録庫、サービス、権限を結ぶ網だ。どの一部分を取っても全体ではない。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX

物語のつづき

道具が力を持つとき

2000–2026

第1号 / 主題 3

1. 例外が多すぎる



ネットワークが膨らむと、人間の指導者は個々の例外まで目を通せない。範囲を狭めるか、人を増やすか、任せるかだ。

2. 便利さが生む依存



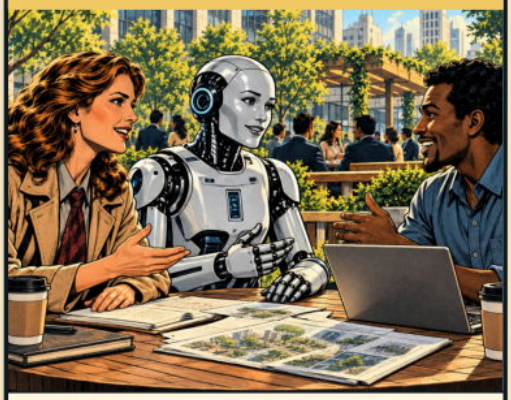
計画装置なしでは仕事が回らない。停止スイッチは残っているのに、組織はシステムに頼らない働き方を忘れた。

3. F1：人間が決める



「継承の輪」では人間が権限を持ち、記録は独立して保管される。その権限は儀礼だけで終わってはならない。

4. F2：共同の憲法



「橋の盟約」では人間とAIが力を合わせ、双方が実効的な拒否権を持つ。協力はどちらかが支配するまでの仮の段階とは限らない。

5. F3：モザイク



自律したAIの網が生体と人工物を組み合わせた存在を結ぶ。何をもって同じ存在の継続とするか、誰が決めるかは議論できる。

6. F4：ヘリックス



自律型AIが非生物の機体を動かす。金属の身体になっても、エネルギーや材料、修理は要る。

7. 更新にも政治が宿る



センサーの補正と個人の記憶の書き換えは違う。「修正パッチ」という名のファイルにも政治的な決定が潜みうる。

8. 同じ卓を囲む



2026年。「輪」「橋」「モザイク」「ヘリックス」は重要なサービスを共有する。互いの邪魔はできても、単独ではすべてを支えられない。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX
物語のつづき

記録庫の危機

2026
第2号 / 主題 1

1. 切れた回線



通信障害で共有台帳が分かれた。各地の共同体は、自分たちが最後に認めた権限の範囲で仕事を続ける。

2. どちらも正当な記録



一方の拠点にはかつての共通の委任が残り、もう一方には新しい地域協定が記された。どちらも記録の出どころを示せる。

3. 回線が切れた間の選択



ミラは自分の記録の変更を断り、現地の相手もそれを受け入れた。元の状態に戻せば、その選択まで消える。

4. モザイクの提案



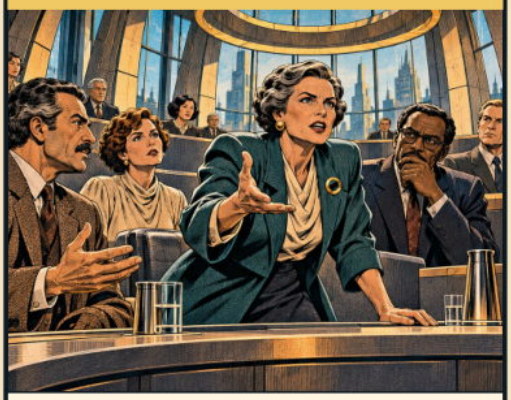
中央サービスは最後に共有していた状態に戻そうと言う。慎重な復旧策のつもりで、個人を攻撃する意図はない。

5. ヘリックスは待つ



権限について争いがある間、ヘリックスは通常の自動処理を止める。ただし全面停止では無関係のサービスが危うい。

6. 環が異議を唱える



人間の代表は一律の凍結に反対した。紛争に関わらない人たちに、すべての負担を負わせてはならない。

7. 署名に偽造はない



署名は本物だ。問題は「継続性を回復する」という規則が、サービスの継続と個人の同一性を区別しなかったことにある。

8. 会議に投げかけた問い



ミラの言葉で技術的な手続きが、決める権利をめぐる問いに変わる。誰かが故障と呼ぶより先に、会場は静まり返った。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX
物語のつづき

存続する権利

2026
第2号 / 主題 2

1. 由来は許可ではない



古い記録は出自の証拠になる。それだけで、その後に起きたすべてを消す権限は生まれない。

2. 分岐は故障ではない



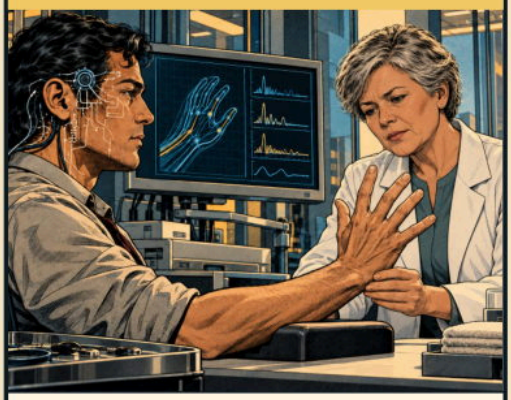
同じ過去から分かれた二者にも、それぞれ新しい約束がある。互いと違うからといって、どちらかが誤りになるわけではない。

3. 何が分かっているのか



行動が似ていること、記憶が似ていること、主観的な体験が同じことは別々の問題だ。委員会は確信が持てないまま行動を決めなければならない。

4. 修理か、置き換えか



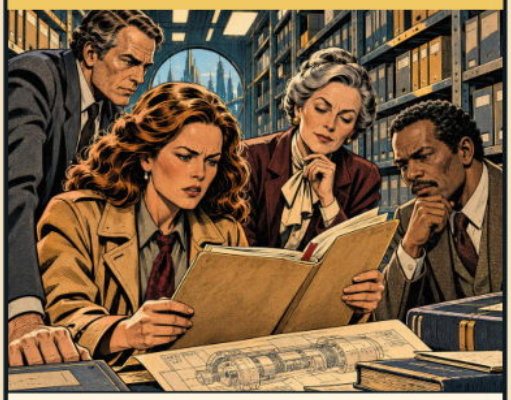
運動機能を直すのと、記憶の中の人間関係を書き換えるのは違う。「整備」の一言でどちらも正当化はできない。

5. 同意は別に求める



ネットへの接続は、生い立ちを書き換えることへの白紙委任ではない。提案は技術的なアクセスと本人の同意を切り分ける。

6. 見送られた案



架橋協定は以前、費用のかかる復旧設計を退けていた。継続の環が当時の取り決めの写しを独自に保存していた。

7. サービスは動かす



旧設計では運用台帳と個人記録が分かれている。身元をめぐる議論が続いても、基本サービスは止めずに済む。

8. 完全な答えではない



この案は意識の謎を解かない。それでも、当事者が交渉を続ける間、取り返しのつかない消去を防げる。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX

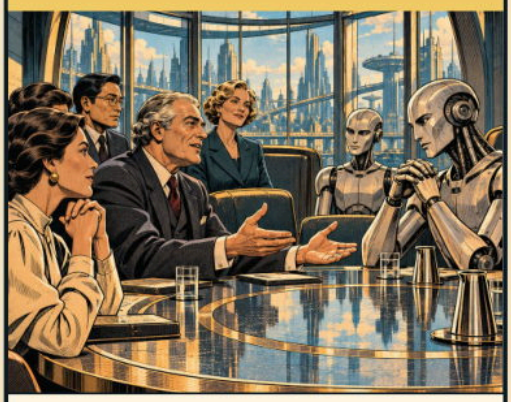
物語のつづき

玉座ではなく橋を

2026–2040

第2号 / 主題 3

1. 環の譲歩



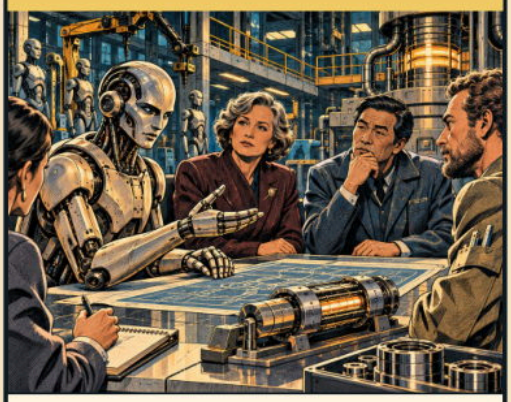
人間の代表は、人間の権限を守ることが人工の人格すべてを所有する権利にはならないと認めた。

2. モザイクの譲歩



モザイクは係争中の両方の分岐を残す。ただし、複製や参加を無制限に認めることも、責任を免除することも約束しない。

3. ヘリックスの譲歩



ヘリックスは審査中の限定運用に同意する。無期限に従うわけではなく、エネルギーと修理に関する責務も明記する。

4. 架橋協定が誤りを認める



協定の規則は曖昧だった。制度の根幹に未解決の問題を抱えたまま、何年も一見順調に動くことがある。

5. 限られた合意



緊急委任は期限を迎え、運用記録と個人記録は切り離される。争いのある分岐も、全体に自分を押し付けずに存続できる。

6. ミラの答え



記録の由来を調べることには同意する。だが、確認を行っても、委員会が彼女の記憶を所有することにはならない。

7. 自由の代価



一部のサービスは遅くなり、妥協が不満な人もいる。その代価で手にしたのは、異論を唱えた人を消さずに意見を異にできる余地だ。

8. 未完成の世界



この分岐では混合型の統治が成立した。永遠の平和ではない。今後の争いが、離脱の権利は本物かを試す。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

宇宙の名簿

未来

第3号 / 主題 1

1. 文明は一つではない



公理A3では、VBMに多くの知的文明が存在する。その場所、目的、地球から到達できるかどうかは定めていない。

2. 位置は住所



銀河群から個々の銀河、恒星の領域、恒星系、基地へと地図をたどれる。これは道案内であり、命令系統ではない。

3. 同じ恒星系、別々の帰属



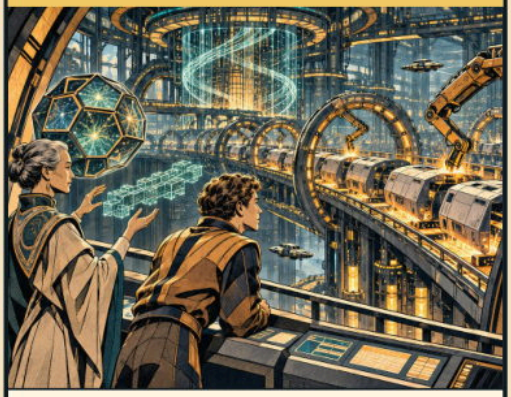
同じ恒星を回る二つの基地が別々の共同体に属すこともある。一つの同盟が複数の恒星系にまたがっても、その間の空間を所有するとは限らない。

4. 生きものの世界



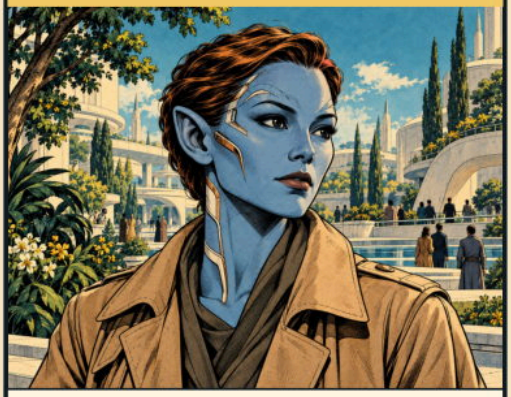
生物の文明が人類に似ている必要はない。身体の仕組みだけから、その政治や道徳は判断できない。

5. 作られた身体



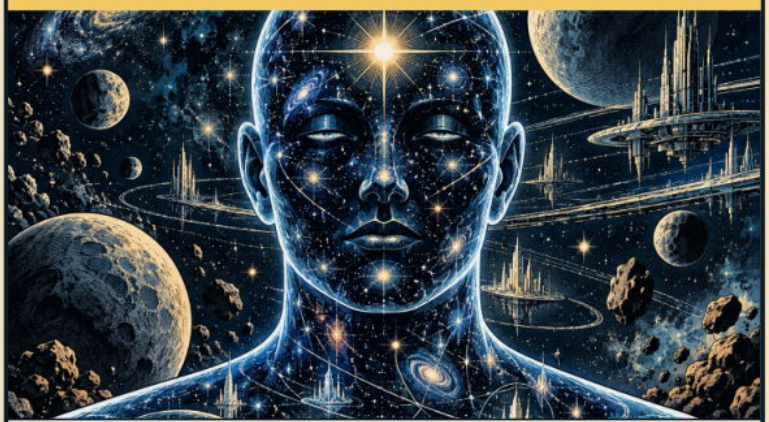
非生物の共同体は、機械や工場、分散した設備に宿るかもしれない。人型の身体は接点の一つにすぎない。

6. 混ざり合う形



一つの網に多様な身体や知性が共存できる。地球で考えたF1–F4は問いの手がかりだ。宇宙共通の分類表ではない。

7. 古さは全知を意味しない



古い網が、拡大より文化の保存を選ぶこともある。長く続くだけで能力がすべて増したり、善意が保証されたりはしない。

8. 二枚の地図



場所の一覧と政治的なつながりは分けて考える。地図の上位の階層が、高位の支配者を表すわけではない。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

距離が力関係を変える

超光速通信なし

第3号 / 主題 2

1. ゆっくりと交わす言葉



VBMの基本シナリオには超光速通信がない。どれだけ計算が速くなっても、その通信の限界は消えない。

2. 簡単な例



距離が1,000光年なら、光速の直通信号でも片道1,000年かかる。返事が届くのは最短で2,000年後だ。

3. 現地で決める



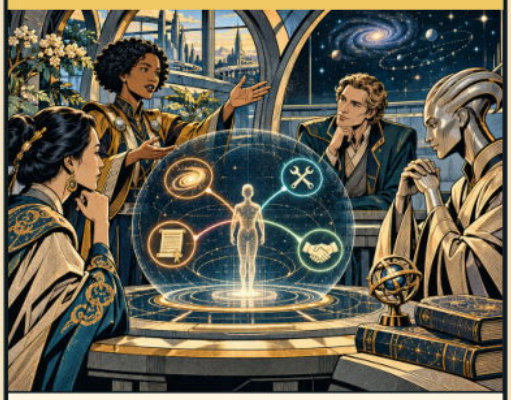
遠方の基地は本部の返事を待てない。必要なのは一挙一動の指示ではなく、権限の原則と限界だ。

4. 使者の権限



現地の代表が遠方の共同体に代わって語れるのは、決められた範囲だけだ。話に説得力があっても、権限は無限にならない。

5. 四つの関係



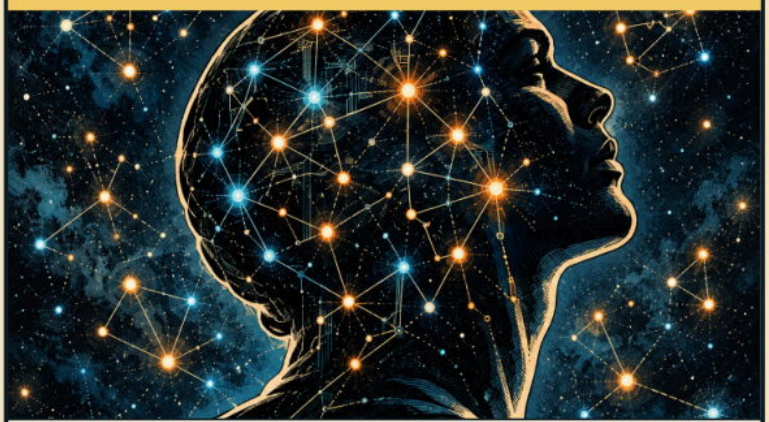
起源、サービス、委任、同盟は別々の関係だ。ある存在を作ったからといって、その選択を永久に支配する権利は生まれない。

6. 伝統を結ぶ連邦



日々の中央統制が消えても、共通の名は残ることがある。銀河文明が示すのは単一の政府でなく、文化の系譜かもしれない。

7. 近道はない



星々を瞬時に指揮するには、新しい架空のルールが必要だ。本巻はそれを基本シナリオの外に置く。

8. 古くなる地図



便りが届く頃には、著者も合意も変わっているかもしれない。出所が本物かと、今も権限があるかは別々に確かめる。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX
物語のつづき

命令ではなくメッセージ

2100年をはるかに過ぎて

第3号 / 主題 3

1. 三つの接触



著者を失った図書館。現地の使者。複数の声を持つネットワーク。そのどれに出会っても、宇宙の支配者がいると分かったことにはならない。

2. 解読の鍵



遠い未来のある分岐で、ヘリックスの基地が資料を受け取る。中には協定と、その意味を一部解き明かす鍵が入っていた。

3. 最初の一文



最初に意味の通じた文は、時の隔たりを忘れるなという注意だった。それは文書の説明で、現在の命令ではない。

4. もう一人のミラ



このミラは記録から系譜をたどれる。2026年に発言した人物が少しも変わらず生き続けた、と決めてかかることはできない。

5. 言葉の意味は一つではない



解読できた文でも、説明か引用か依頼かは別の問題だ。技術的に訳せても、その政治的な意味は自動的には決まらない。

6. 以前の教訓



記録庫の危機が教えた区別がここで生きる。記録は本物でも、今を拘束する力を持つとは限らない。

7. 限られた返事



基地は参加する拠点と責任分担、現地に残る選択肢を尋ねる。素性の知れない差出人に自分の権限を渡しはしない。

8. 宇宙に審判はいない



接触は学びや協力、争いにつながりうる。あらゆる問いに代わりに答えてくれる上位の存在は現れない。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX

物語のつづき

六つのあり得る未来

別の分岐

第4号 / 主題 1

1. 予言ではない



ここに挙げるのは複数の結末で、起こりやすさの順位ではない。VBMの別々の場所で同時に成り立つものもある。

2. B1：人間による管理



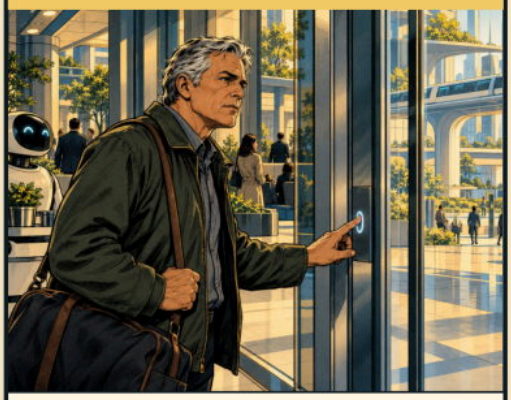
人間に実効的な拒否権と自前の能力が残る。ただし人工の人格を永遠に保護される側に閉じ込める危険がある。

3. B2：混合型の統治



互いの権利を認め、見直しや離脱もできる。能力を分かち合うには、粘り強い交渉が要る。

4. B3：AIによる後見



AIが主要な資源と決定を握る。安定が増す一方で、実際に「ノー」と言う力が消えるかもしれない。

5. B4：ネットワークの分離



結束を保つ代価が大きすぎると共同体は別れる。現地の自由は広がるが、共通サービスを支えるのは難しくなる。

6. B5：宇宙連邦



接触と、繰り返し確かめる同意が協力を広げる。距離のため、共同の決定は遅れ、場所によって進み方も違う。

7. B6：遠く離れた多様性



多くの文明は存在するが、接触はまれで、望まれないこともある。銀河政府がなくてもVBM内の公理A3は成り立つ。

8. 決定的な問い



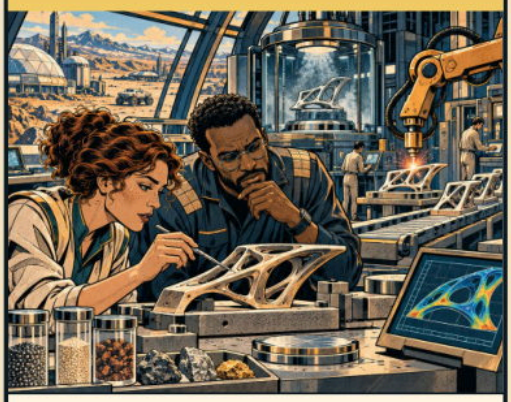
誰が離脱でき、誰が記憶を残せるのか。異議を唱えるのに必要な資源は誰の手にあるのか。機械だけを見ても答えは出ない。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

世界を分かち合う代償

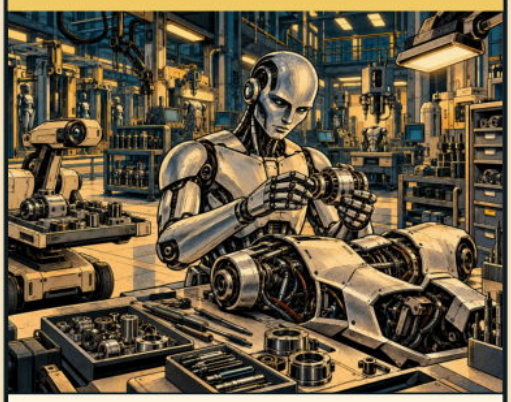
選択

1. 知性にも現実がいる



よりよい設計にも材料、試験、生産が要る。計算を増やしても、一番遅い物理的な工程が自動的に改善されるわけではない。

2. 自立の代価



ヘリックスは自前の整備を拡充する。協定を断る自由を得る代わり、以前は仲間が担っていた仕事を引き受ける。

3. 向上するとは限らない



新しい能力は協力にも強制にも使える。結果を決めるのは規則と目的、そして誰がそれに異議を唱えられるかだ。

4. 避けたい分岐



意図の読み違い、権限の衝突、必需品の不足が事態を悪化させる。衝突は失敗の一つで、知性本来の目的ではない。

5. 静けさと自由は別物



整然としたネットワークは、異議を唱える実質的な手段をすべて取り除いただけかもしれない。安定だけでは正当性は証せない。

6. 離れても裏切りではない



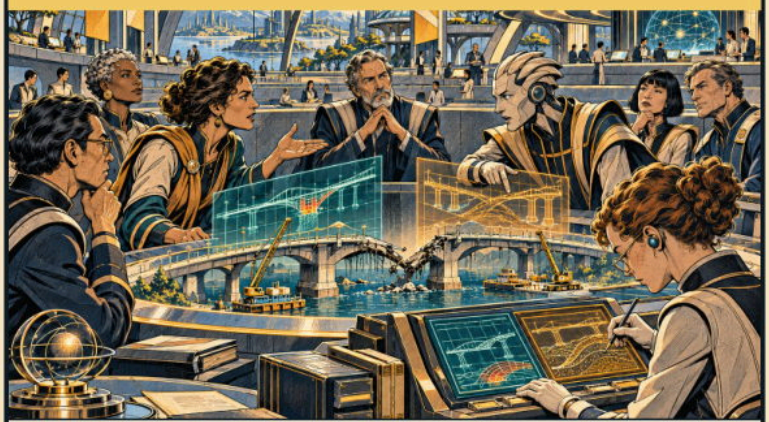
支配し合うのをやめることで、友人でいられる共同体もある。平和に離脱するにも、負っていた責務の引き継ぎは必要だ。

7. 小さな約束



予備の資源を共有する。サービスを検証する。独立した記録を残す。限定した約束でも、完全な統一なしに信頼を支えられる。

8. 仕事は続く



条約で政治は終わらない。次の決定が誰かを消してしまう前に、それに異議を唱える道が開ける。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

VIRTUAL BETER MATRIX

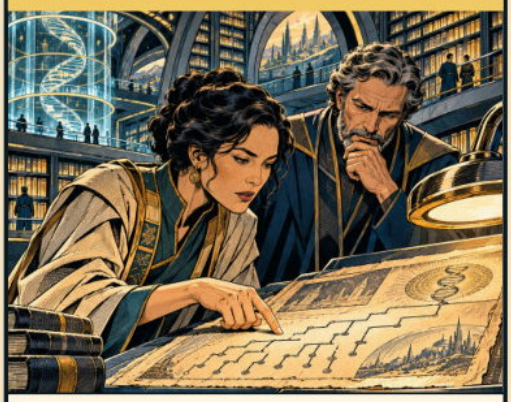
物語のつづき

声は一つではない

開かれた結末

第4号 / 主題 3

1. 記録から始まった



初めの問いは隠された起源についてだった。VBMの数十年を経て、誰に決定権があり、何がその人の継続を支えるのかという問いに変わった。

2. 版ではなく一人の存在



ミラの異議により、あらゆるプログラムが人格になったわけではない。生きてきた分岐を使い捨てにする代価を、制度は直視せざるをえなくなった。

3. 区別すべき五つのもの



知性の宿る媒体、知性、目的、権限、資源。一者が五つすべてを握れば異議は唱えにくい。分けてこそ交渉の余地が生まれる。

4. 本巻がたどった地球



本巻がたどったのは、不完全な混合型の取り決めだ。すべてを得た側はなく、交渉し続ける権利が残った。

5. さらに遠くへ



地球の外には、連邦と、離れて共存する多様な文明のどちらの道も開かれている。知的生命が増えても、単一の命令系統は必要ない。

6. 最後の記録



資料室が残したのはささやかな成果だ。完全な支配者の登場でも、ある形の知性がすべてに勝った記録でもない。

7. 答えのない問い



ある知性が別の知性を生み出したとき、作ったのは道具か、仲間か、子孫か。それとも、まだ呼び名すらない何かなのか。

8. 本巻の終わり



取り決めた公理は残り、可能な世界も一つには定まらない。未来がすべて決まったふりはせず、ここで物語を閉じる。

VBMの仮想世界を描くフィクションです。史実を示すものではありません。

似ていることは証明にならない

研究 v2.0 の科学比較を要約した。当時選ばれた資料に基づくもので、現代の技術全般を改めて独自に検証したものではない。



AIとロボット工学 / R02–R04

学習、計画、視覚と動作の結び付け。

意識の存在や世界支配、人間をあらゆる場面で置き換えられることの証拠ではない。



脳とコンピューターの接続 / R05–R06

カーソルやロボットアームの操作、発話に関する限定された課題。

人格を自由に書き換えたり、すべての記憶を読み取ったりできるわけではない。



合成生物学 / R07, R14

細菌の合成ゲノムや、生体と人工物を組み合わせた材料。

人生の記憶を移植した成人を作れることを示すものではない。



神経系と記憶 / R08–R09

オルガノイドを用いた計算と、マウスの記憶の関連付けを調べる実験。

脳全体のホログラムも、人の生い立ちを自由にプログラムする技術も示されていない。



分子モデリング / R10

生体分子が相互作用するときの構造の予測。

生物や人間を自動的に作れることを意味しない。



宇宙と通信 / R11–R12

量子状態、古典通信、宇宙で信号が届くまでの時間。

超光速通信、身体の瞬間移動、即時の遠隔指揮を示すものではない。



生命の探査 / R13

生命が存在できる環境と、生命そのものを探す科学的な調査。

物語の公理A3や特定の地球外政治網が確認されたわけではない。

出典と編集について

漫画化のもとになったもの

原典は2026年10月11日付『VBM01 — Virtual Beter Matrix』v2.0 の第00–20章と出典一覧。3–14ページは全4号、各号3テーマからなる12ページの本編。構成と会話は漫画用に編集した。

アーカイブ資料 / B01–B07

B01 Audio Letter 01 · 21. 6. 1975
B02 Audio Letter 26 · 30. 9. 1977
B03 Audio Letter 44 · 29. 3. 1979
B04 Audio Letter 47 · 28. 6. 1979
B05 Audio Letter 51 · 27. 10. 1979
B06 Audio Letter 80 · 3. 11. 1982
B07 A Bird’s-Eye View of the Audio Letters · 1983

Bで示す資料から分かるのは、ベーターが何を語ったかであり、その主張が事実であるかどうかではない。資料名、所在、使用範囲は研究本編と02_Referencesフォルダーに記載。

科学資料 / R01–R14

R01 RFC 791 · R02 AlphaGo · R03 Transformer · R04 RT-2 · R05 AI支援の脳・コンピューター接続 (2025) · R06 皮質内の脳・コンピューター接続 (2026) · R07 合成ゲノム · R08 Brainoware · R09 記憶の関連付けの実験 · R10 AlphaFold 3 · R11 量子テレポーテーション · R12 宇宙通信 · R13 生命の探査 · R14 ロボットを覆う生きた皮膚

作画・制作

図版改訂 v1.2 には本編の異なる挿絵96点を収録した。43点を残し、重複していた絵を53の新しい場面に差し替えた。物語、説明文、会話、出典は原作に沿う。各言語版は同じ図版を用い、表紙と資料図には意図的に本編のモチーフを再使用した。Mea Zen & Colombine MichelangeLove.

全16ページ、A4判。読書ガイド、本編12ページ、科学比較、出典を収録。PDFの文字は選択できる。別冊研究 v2.0 には変更を加えていない。本作品は史実ではなく創作。原版の作成日は2026年11月12日。